

娘との初めての競馬

おののきむち

●受賞のことは
執筆中は女性の公人の発言がテレビを席巻して「このハゲー！ チーがーうだろ、ちがうだろー」と桐喝する声が、私への妻の怒りの声となって錯覚して聞こえてきて、家庭内の愚痴を吐き出し続けている事と後悔も覚えながらも、最後までよく書いたと思っています。我が家の恥部を書き過ぎたと後悔もしましたが、娘と行った京都競馬場の記憶が形になった事が何より嬉しく思います。ともあれ評価を下された皆様へ感謝致します。

●プロフィール
宮城県美里町(旧小牛田町)出身。食堂を経営。自称カントリー・ジェントルマン。きむちは愛犬の名前。最近頭頂部の薄毛に悩む。競馬で大儲けしたら増毛してふさふさになりたい。だが願望はなかなか叶わない。

一人娘は大学3年。働けど働けど稼ぎは京都で離れて暮らす娘の学費と仕送りに消えていく。出会った頃は淑やかだった妻は気が強く夫の命を縮めるという丙午生まれ。今では家計を独占して、私の瘦身に鞭を打ち、私に節約を強要し、私の小遣いは半減。私はせこい競馬で我慢する。競馬で儲かる事は稀だが、儲かったと妻が知れば理不尽にも即没収。儲かっても妻には知らぬ顔で柳に風と受け流すが、妻は私が仕留めた獲物を狙う獅子と化し、私の行動を観察して、隙あれば横取りしようと画策する。帰省中の娘は妻に仕込まれ、私を見ればぶりぶりする。父親は辛い。競馬は私にとって屈強な精神を養う修行でもある。

前日の阪神Cで勝った資金を元手に小遣い倍増計画を目論んだ有馬記念の日。母屋の大掃除から離れの競馬部屋へこっそり抜け出し、こたつで有馬記念のパドック中継を見ていた。

「おとうちゃん、サボってまた競馬！」

愛犬のコーギーを抱いた娘が凄く剣幕で部屋に怒鳴り込んできた。気の強い娘に口答えすれば倍返しをくらう。すると私を見つけた愛犬が突然娘の顔を、ペロペロ舐め回し、両手を塞がれた娘は抵抗できずに愛犬を床に下ろし、呆れた顔で穏やかにこたつに入った。ピッチを救ってくれた愛犬は私へ駆け寄り、私を見つめ

てぼんぼり尾を懸命に振るので私は愛犬の意を酌んで頭を撫でて餌をあげた。

娘より愛犬の方が一日3度の餌と毎日の散歩を欠かさない私の恩をわかってくれる。私の頭髮が薄くなれば体毛が薄くなり、私が老眼になれば白内障になった愛犬。愛犬は似なくてもいいところまで私に似ているが、血を分けた娘は本当に私の娘かと思うほど、似ていない。この気の強さは妻譲り。これじゃ恋人もできっこない、クリスマス前に帰省するのかわかると思心するが、内心安心もする。「この馬、背が高く足が長い、長距離向きよ、きつと勝つよ」とパドックを歩くキタサンブラックを一目見た娘が自信満々で言った。「いや、勝つのはサトノダイヤモンド」と素人娘の発言に思わず反論してしまった。

長距離戦の有馬記念。長距離戦で十分な実績があるキタサンブラックを今回も買おうと思わなかったのは、サクバクシンオーのサプリメントの血が入っているからだ。

そんな馬の血統を娘に説明すると「じゃ私はどうなの？」と娘が高圧的に再反論した。

私は父系、母系とも国体選手を持つサプリメントの家系に生まれ、やはり短距離が得意のサプリメントだったが、長距離は全く苦手だった。そんな自分の経験

った時、体の芯から震えたが、無邪気に欣喜雀躍する娘を見て、溢れ出るドーパミンを必死に抑えて冷静に考えた。

負けず嫌いの娘の顔を立てる事が優先、この際、嘘も方便、馬券を外した事にしようと思張ってしまった、千円の外れ馬券を娘に見せ、地団駄を踏んで悔しがって見せた。演技力は完璧。まずは嫌いな娘はやはりキタサンブラックの単勝を買っていた。上機嫌に一変した娘を凄く凄いと褒めまくると、「今度は勝つ馬を教えてくださいからまた来ようね」と凶に乗った娘は満面の笑顔。娘が心を許した事が素直に嬉しく、娘との距離が一気に縮んだ気がした。娘の換金に同行し、トイレに行くふりをして換金して8万5千円ににんまり。万事思い通りに事が運び過ぎ、気が緩んだ。

娘がキタサンブラックのぬいぐるみが欲しいと言うので支払ってあげた後、豪勢な夕食を振舞おうとしたが、「負けたんでしょ、ここのでいい」と娘は私の懐を氣遣った安撫な店で、さつきは飲めなかったコーラを美味そうに飲んで鶏のから揚げを貪る娘が健気に思え、私は嘘を後悔した。私が鶏肉を嫌いな事を知りながら私への配慮のない嫌味のような娘の身勝手な店選びが、当然の報復に思えてきて、私は血圧の上昇を心配して塩辛いポテトを啄みながら罪悪感が募り、帰りに持ち帰りのうな重の上を2つ買って娘のアパートに着いた。

うな重の上はやり過ぎたと思いつつ娘がうな重を類張る姿に父親の充足感を感じていた。「今日勝ったお金で父の日に発毛剤送るね」という娘の言葉にほろりとさせられ危うく自白しそうになったが、娘が私の頭頂部を悪戯に覗いてにやにや笑うので、人の悩みにつけ込みやがってと思い、睨んだ先の娘はスマホで妻に電話をかけていた。娘が妻に何を話すのか気が気でない。カンの鋭い妻が、聞き耳を立てていると娘は「やっぱおとうちゃんはカミに見放された男だった」と神と髪をかけて上手い事をぬかして私を見て爆笑していた。娘にばれていないと一安心して敢然無視して立ち上がるも懐かしい物を見つけた。

娘が幼い時に私があげたオグリキャップのぬいぐるみが昔のままベッドの枕元に一つ置かれていた。それは私が独り立ちした時に地方出身の2流血統ながらエリート達と堂々と渡り合い勝利するオグリキャップの姿に自らを重ね合わせ、そうなりたいたいと思いつたものだ。血統など関係ない、大事なのは負けず嫌いの意地とオグリキャップの走る姿を見て教えられたのだ。そのぬいぐるみには当時の私の思いが籠められていた。娘は当時の私の思いも知らずに、そのぬいぐるみを今も変わらず大切にしている事を初めて知り感激したのだ。娘にとっては競馬バカの父親の象徴かもしれないし、マラソンでも勉強でも何事にも負けず嫌いで一喜一憂してきた娘なりの思い出があるのかもしれない。そこではたと思った。娘の負けず嫌いは、当時の私のそうなりたいたいという思いが時空を超えて私から娘に伝わった結晶と置いて仕方なかった。私と似ていないと思っていた娘との遺伝子以上の親子の強い繋がりを感じて胸が熱くなったのだ。

突然背中をつつかれ、「ママが代わってだって……」と言う娘にスマホを渡された。

「上のうな重食べたって……この嘘つき！ 当てたでしよ。テレビ見たよ、馬単が14倍だから5千円でも……7万よね。あの子も就職活動で物入りだから……罰よ、5万置いてきな！」

妻は一方的に捲し立て、私に弁解の隙も与えず、電話を切った。妻の洞察力に青ざめた。私の完全犯罪も馬券を買う私の癖も配当も全て妻に見抜かれた。娘は屈託なく笑ってキタサンブラックのぬいぐるみを枕元のオグリの横に並べていた。ズボンのポケットに入れたたくしゃくしゃの7枚の福沢さんはどれも泣き顔で別れを惜しんでいるように見えたが、娘の卒業まで11カ月の辛抱、悪銭身につかずと諦め、私は泣く泣く娘に「大事に使え」と5枚渡し、家に着き、土産のうな重の梅を一つ妻に献上し、罪人扱いされる前に土下座で謝って、2枚の福沢さんを死守したのだ。



降り立ち、電車を乗り継いで淀駅で下車して大学4年になった娘との待ち合わせ場所に早く着いた。この日の青空のようなブルーのシャツと黒のブランドパンツで私は爽やかに決めてきた。京都は暑い。娘を待つ間に気を利かせて娘の好きなコーラと私はアイスコーヒーを買っておいた。地味な白いTシャツとジーンズ姿の娘が現れて私の姿を一目見て、「派手、恥ずかしい」と言うので、挽回しようと余計な事をして娘のコーラに誤ってミルクとガムシロを入れてしまい、私はミルク入りの甘過ぎるシユワシユワを飲む羽目に。嫌々苦いコーヒーを飲む娘は私に軽蔑の眼差し。のっけから父親の面目は崩れ、私は自分のドジを責めながら私を無視して先に行く娘の後を追いつけて京都競馬場に到着した。

天皇賞のパドックのキタサンブラックに注ぐ娘の視線は熱く、何を話しかけても娘は黙って無視を続けた。娘を恋人に奪われた気分が寂しくなり、パドックを出ると機嫌を取ろうとして、この日の為に貯めた1万円のへそくりから3千円の軍資金を娘に渡すと、娘は「千円がいい」と言いながら残りをちゃっかり財布に仕舞う。猫糞したくせに娘は「使い過ぎは駄目！」と妻のように節約を強要するので、「御意」と言って抵抗せずには不服従を決めた。妻から逃れた解放感で現金が現金を生む競馬場の誘惑には勝てっこない。早速馬券を買ってきた娘に「何買った」と訊いても「1点、でも教えない」と秘密主義に徹してつれない態度。私はキタサンブラックからシユヴァルグランとアルバートの馬単を2枚の馬券に分けて千円ずつ買い、後からさらにキタサンブラックからシユヴァルグランの馬単馬券を5千円買った。後から買ったのは娘には勿論秘密。当たっても千円馬券を見せつけようと企んだ。ばれてはいけないと肝に銘じて、3枚の馬券をズボンのポケットに仕舞い、娘と人込みをかき分けてスタンド前に出た。

2番手につけていたキタサンブラックが大歓声で1着にゴールし、2着にシユヴァルグランがゴールに入